

## 壬辰戦争と景福宮

### はじめに

本稿は、韓国の朝鮮時代の王宮である景福宮と日本との関係を検討しようとするものである。検討すべき多くの出来事がある中で、本稿では、特に、一五九二年の豊臣秀吉の朝鮮侵略の時の景福宮の焼失に関して、いつ、誰によって、焼失させられたか、を資料に基づいて検討する。

まず、この日本と朝鮮との戦争の名称について検討する。日本での朝鮮史の概説書や高校の日本史や世界史の教科書などを見ると、「豊臣秀吉の朝鮮侵略」とした上で、「文禄・慶長の役」と記述している<sup>(1)</sup>。韓国では「壬辰倭

乱・丁酉再乱」と記述することが多い。日本での「文禄」と「慶長」は元号である。文禄元年が一五九二年であり、慶長二年が一五九七年である。従って韓国では使用しない。また「壬辰」と「丁酉」は干支であり、壬辰の年が一五九二年で、丁酉の年が一五九七年である。「倭乱」という用語を使用しているので、日本では使用されない。つまり、日本と韓国では、用語が異なり、共通の用語がない。

韓国で二〇一二年から新設された高等学校「東アジア史」の教科書<sup>(2)</sup>では、「壬辰戦争」という用語を使っている。これは高等学校の教科書なので、広範囲に広まる可能性を持っている。日本では、二〇〇八年に鄭杜熙・李璟珣編著『壬辰戦争』<sup>(3)</sup>が出版された。この本は、韓国で

君島 和彦

『인진왜란―동아시아삼국전쟁』<sup>(4)</sup> というタイトルで出版された。「壬辰倭乱」という用語を使っているが、日本語版を出版するに際して「壬辰戦争」という名称を使用した。その理由を「日本語版への序文」で詳しく述べている。この戦争は日・韓・中で異なった名称が使われ、しかも「あまりにも強い民族主義的言説」で語られていた。二〇〇六年六月に開催された、この戦争を主題とした国際学会会議で、「国際的に通用するにふさわしい名称を定める必要がある」ということで「意見の一致」を見た。東アジア三国では「十千十二支」で年代を表記する伝統があるので、最初の戦争の起こった一五九二年の干支「壬辰」を用い、「壬辰戦争」と表記し、韓国が戦場だったので、韓国語の発音「イムジン」を用いて「壬辰戦争」とした。一五九七年の「慶長の役」「丁酉再乱」については、壬辰の年の戦争と別々の戦争であるかのような誤解を招きかねないので、「一五九七年の日本軍の再攻勢」と表記することにした。翻訳を担当した小幡倫裕の「訳者あとがき」によれば、韓国語原書では「壬辰倭乱」を使用しているが、日本語版で「壬辰戦争」に変更したのは「編著者からの要請」によるという。本書の主張とタ

イトルの「矛盾をなくし、本書の趣旨との一貫性を示したい」ということで改めたという。

本書の主張は、基本的に筆者と同じである。日本と韓国で同一の名称を使うことの重要性は、二〇〇七年に出版した『日韓歴史共通教材 日韓交流の歴史―先史から現代まで』（明石書店）でも痛感した。一五九二年は豊臣秀吉が全国統一を達成した後であり、その意味では豊臣秀吉一人の意図だけではない「日本の朝鮮侵略」である。さらに、「文禄・慶長の役」と「壬辰倭乱・丁酉再乱」では、どちらも「共通教材」には相応しくないとということで、大議論の結果「十六世紀末の日本の朝鮮侵略」とした。近代の「日本の朝鮮侵略」との混同を「十六世紀末」をつけることで解決した。この時は「壬辰戦争」という名称は提唱されなかった。このような経験からも、「壬辰戦争」を使いたいと考えている。但し、「壬辰戦争」をどう発音するかについては、「ジンシン戦争」で良いと考える。戦場が韓国であったことは否定しないが、現在、日本で使用する場合、「壬辰戦争」をどう発音するか、とは別問題であると思う。韓国人は「壬辰戦争」を「イムジンチョンジェン(임진전쟁)」と韓国語読みで発音し、「イ

ムジン戦争(センソウ)」とは発音しない。日本で使う場合は、日本語の発音「ジンシンセンソウ」で良いと思う。

また、日本でも「壬辰戦争」という名称を使った研究会が開かれている。日本史研究会は二〇一六年度七月例会<sup>(6)</sup>で「東アジア諸国家にとっての「国際戦争」——文禄・慶長の役(壬辰倭乱)——と題して研究会を行った。報告者とタイトルは車惠媛(延世大学校)「倭寇的状况」から壬辰戦争まで——中国の反応を中心として——と米谷均(早稲田大学)「壬辰戦争」終結をめぐる日明両国の演出儀礼——冊封儀礼・施餓鬼供養・献俘棄市——で、池内敏(名古屋大学)がコメントを担当した。報告者は「壬辰戦争」を使用している。例会の趣旨には、「近年、韓国では東アジア三国が参加した国際戦争であったことから、「壬辰戦争」という名称が提起されている。戦争の具体的な展開過程や戦後処理問題など多様な分野で、日本・韓国両国で膨大な研究成果が蓄積されている状況である。」この状況を踏まえて「本例会では日本と韓国、両国の研究者を招き、近年の韓国での研究成果も踏まえながら、近世国家と戦争の関係について見直す機会としたい。」と記している。

日本と韓国の研究状況を踏まえて、「壬辰戦争」という立場から例会を開いている。このようなことを考慮すれば、「壬辰戦争」という名称は、使用可能な名称になりつつあるといえよう。

### 一、焼失した景福宮

一三九二年に太祖が朝鮮王朝を立て、太祖によって創建された景福宮は、建国二〇〇年目の一五九二年に始まる壬辰戦争で焼失してしまった。景福宮が日本と直接的な関わりを持った最初の出来事が壬辰戦争である。

壬辰戦争によって「景福宮をはじめとする王宮の建物の多くも……焼失した<sup>(7)</sup>。」ということはよく知られた事実である。それでは、誰が、どのようにして、景福宮を焼失させたのか。このよく知られた事実を検討してみよう。

景福宮が壬辰戦争の時に焼失したことは、多くの研究書が記している。これらは『宣祖修正実録』(宣祖二五年(一五九二年)四月一四日癸卯二八番記事)の次の記事に依拠している<sup>(7)</sup>。翻訳してみれば、

都城の宮省に火が出た。王の車駕が離れようとすると、都城の中の奸悪な姦民が先に内帑庫に入って宝物を争って持っていった。やがて王の車駕が出ていくとすぐに大きな反乱が起きて、先ず掌隷院と刑曹を燃やしたが、これは二ヶ所の官署に公私奴婢の文籍があるためであった。そしてついに宮城の倉庫を大きく略奪して火をつけて痕跡をなくした。景福宮・昌德宮・昌慶宮の三宮が一時に全部燃えてしまった。昌慶宮はまさに順懷世子嬪の櫝宮がある所だった。歴代の宝玩と文武楼・弘文館に大事に保管しておいた書籍、春秋館の各朝実録、他の倉庫に保管された前朝の史草、【「高麗史」を修撰する時の草稿】「承政院日記」が全部残らず燃えてしまった。内外倉庫と各官署に保管されたものも全部盗まれて最初に燃えてしまった。臨海君の家と兵曹判書洪汝諄の家も火に焼けてしまったが、この二家は常に多くの財物を集めたと評判が立っていたためであった。留都大將が何人を切って群衆を警戒させたが、乱民が集団で立ち上がって禁止することはできなかった。

この内容を理解するために、当時の事態を簡単に説明しよう。<sup>8)</sup> 豊臣秀吉の派遣した日本軍は、宗義智と小西行長などの第一軍が元禄元年（一五九二年）四月一二日に釜山に上陸し、加藤清正と鍋島直茂らの第二軍が四月一七日に釜山に上陸した。以後、第九軍までが続々と朝鮮半島に攻め入った。日本軍は連戦連勝で四月二六日に忠州で慶尚道巡辺使李鎰の軍を破った。この知らせが漢城にもたらされ、国王は平壤に都を移し、明の援軍によって回復をはかることにした。そして、四月二九日、国王とその一行は都落ちをはかった。国王が漢城を放棄して逃避したために、漢城で民乱が起こったのである。

ここで重要なのは、第一に、日本軍の漢城入城前に国王一行は漢城から避難したことである。第二に、そのために王のいなくなった宮闕に乱民が入り財宝を盗み出したことである。第三に、さらに掌隷院と刑曹が襲われたことである。ここには奴婢文書があつて、奴婢身分から抜け出すために、文書を焼いてしまったのである。第四に、景福宮・昌德宮・昌慶宮の三宮が全部燃えてしまったことである。第五に、歴代の宝玩や、文武楼・弘文館

に保管されていた書籍、春秋館にあった各朝実録、他の倉庫に保管された『高麗史』を修撰する時の草稿や、『承政院日記』が全部燃えてしまったことである。

このように、『宣祖修正実録』によれば、景福宮は、昌德宮、昌慶宮と共に、日本軍の入城前に全焼してしまつたことになる。日本軍は、一五九二年四月二八日に忠州で第一軍と第二軍が合流し、進路を分けて漢城に進んだ。そして五月三日、宗義智と小西行長などの第一軍が東大門から、加藤清正、鍋島直茂らの第二軍は崇礼門（南大門）から入城した<sup>(9)</sup>。つまり、日本軍の入城は、国王が漢城を離れた五日後である。

## 二、景福宮には誰が火を放ったか

景福宮は日本軍の入城前に乱民によつて全焼した、と多くの研究書に書かれている。しかし、景福宮に関する代表的研究者の一人である李康根は、著書『景福宮』<sup>(10)</sup>で異説を主張している。李康根は、景福宮研究に関して、「六〇年代の張大遠、八〇年代の李康根、九〇年代の洪順敏の研究が代表的である」<sup>(11)</sup>と評価される研究者であり、一

九八四年に韓国精神文化研究院附属大学院に提出した碩士學位論文「景福宮に関する建築史的研究」は、一九八〇年代の「景福宮に対する研究の水準を高めた代表的な」研究であると評価されている。このような景福宮研究の専門家の主張なので、検討に値するといえよう。

李康根は、著書『景福宮』<sup>(13)</sup>の中で、『京城府史』<sup>(14)</sup>（第一巻）に引用されている鍋島直茂軍と行動を共にした泰長院の僧積是琢の『朝鮮日記』<sup>(15)</sup>を論拠にして、第二軍の加藤清正と鍋島直茂らが入城した五月三日には景福宮は燃えていなかったと述べている。

以下、李康根『景福宮』の内容を紹介しよう。李康根は、『京城府史』に引用されている鍋島直茂軍の僧積是琢の『朝鮮日記』を引用した後で「倭軍が入城した時、景福宮は火に燃えたどころか、神仙が住む所かと思えるほど美しい姿を持つており、従軍倭層の驚きと嘆声をかき立てたのである」<sup>(16)</sup>と記している。その積是琢の『朝鮮日記』を『京城府史』から引用してみよう。

北山之下。南面立紫宮。削石為四壁。誠五步一樓。十步一閣。廊腰縵迴。簷牙高啄。不知謂何殿何閣矣。

丹墀決御溝。自西向東流。其正面有石橋。削石蓮花為欄干。柱橋之左右。安置石獅子。四疋而令護橋。此時懷得愛花須作護花欄之句。其中央以削石。壘垣于八尺。艮巽坤乾隅者。置石獅子於四々十六疋矣。其上立紫宸清涼之二殿。以石為負棟之柱。四面彫上下龍也。以瑠璃為瓦。縫瓦頭皆青龍也。以梅檀為架梁之椽。一椽端一風鈴。畫棟朱簾。伸金銀連珠玉。天上四壁者。以五色八彩畫麒麟鳳凰孔雀鸞鶴龍虎也。紫宸之階級者。中者石鳳凰。左右者鋪石丹鶴。誠龍界耶。仙界耶。不所及凡眼。

漢文なので読み下してみよう。

北山の下に南向きに紫宮（景福宮）があつて、石を削つて四面で防壁を作つた。誠に五歩行けば一樓があり、十歩行けば一閣があつて、行廊を巡らし軒が高い。殿閣の名前は分からない。赤い踏み石で堀を作り、その堀は西から東に流れる。正面には石橋があつて、蓮の花を彫刻した石の欄干で作られていた。橋脚の左右には石の獅子四疋が橋を護っていた。そ

の時、「愛花須作護花欄」の句を思い浮かべた。その中央には石を削つて垣を積んであり、その高さが八尺で、隅毎に方向に合わせて四疋ずつ十六疋の石の獅子が置いてある。その上に紫宸殿と清涼殿の二殿が立っている。石で出来た棟の柱の四面に龍を上下に彫刻していた。屋根には瑠璃で瓦を作り、瓦の頭は全て青龍で出来ていた。垂木は梅檀の木で、垂木ごとに一個の風鈴がぶら下がっていた。彩色した梁と赤い簾には金と銀の珠玉が繋がっていた。天上の四方には五色八彩で麒麟、鳳凰、孔雀、鸞、鶴、龍、虎が描かれていた。紫宸殿の階段の真ん中には石で彫つた鳳凰が敷かれ、左右には石で彫つた丹鶴が敷かれていた。誠に龍の世界か、神仙の世界か、凡人の目には分からないほどだ。

この文章について、李康根は「我々は『朝鮮日記』を通して次のような貴重な事実を推定できる。」として、次のように評価している<sup>(17)</sup>。

宮内の前の部分を貫流する明堂水の上には石の橋

があつて、その欄干は朝鮮王朝宮廷様式を代表する蓮の葉の束柱で飾られており、橋の左右に石で作った鳥獸彫刻四匹が配置され、橋を守護する姿を保っている<sup>(18)</sup>。

宮廷核心部の石造基壇四角に石鳥獸彫刻を各々四匹づつ彫つてあるが、これは現在その場所にある三匹(雄と雌一對と子)の獬豸(ヘテ)の彫刻(柳得恭は犬と描写)を誤つて説明したので、今残っている石彫刻が朝鮮前期に作られたものであることを確認させるのである。

そして、倭軍が入城した時、石で築いた景福宮内に無数の殿閣と行廊があつたが、名前を知られないように扁額を全部取り出した状態であつた。それで八尺の高さの基壇の上に紫宸、清涼の二つの殿堂があつたと言うが、文脈で見ると、紫宸殿は勤政殿を示しているようである。日本の京都にある天皇の御所は正殿である紫宸殿、寢殿である清涼殿を中心に構成されているので、これを景福宮にあてはめて文を書いたとみられる。

以上のように、李康根は鍋島直茂軍の僧積是琢の『朝鮮日記』に依拠して、『宣祖修正実録』や柳成龍の『西崖集』などの当時の記録の記述を否定している。例えば、壬辰戦争で朝鮮軍で重要な役割をはたした柳成龍が燃えた宮闕を直接目撃した時期は、朝鮮と明国の連合軍が漢陽を奪還した後の一五九三年四月であつて、この時はすでに宗廟も焼け、三つの宮闕は全て壊れてしまった後であつたという。

それでは李康根は、景福宮はいつ、誰によつて焼かれたしまったのかについて、どのように主張しているだろうか。このことについて、李康根は「平壤城戦闘で敗れ、漢陽までも奪還されるという敗戦を繰り返した倭軍が退却すると同時に、宗廟と宮闕を始めとした都城施設を放火し略奪と殺戮を恣に行つたのである」<sup>(19)</sup>と記している。しかし、李康根は、日本軍の撤退時に景福宮に放火したという資料は示していない。

### 三、『朝鮮日記』の検討

『京城府史』に引用されている『朝鮮日記』と同じ文

書は、四種類確認できる。一つは、『京城府史』にも引用されている『朝鮮日記』で、現在は内閣文庫にあり、国立公文書館デジタルアーカイブ<sup>(20)</sup>で見ることができる。二つは、『佐賀県史料集成古文書編』<sup>(21)</sup>に収録されている活字本である。佐賀県史料編纂委員会が原文から活字に起こして収録したものである。三つは、東京大学史料編纂所にある泰長院文書の影写本である。ここには『朝鮮日記』も含まれており、草書体で書かれた毛筆の古文書である。文章は内閣文庫の『朝鮮日記』と同じだが筆跡や本の形式も違う。内閣文庫の『朝鮮日記』は楷書体で綺麗に清書されている。四つは、泰長院にある原本である。以上の四種類である。

内閣文庫の『朝鮮日記』の末尾には「明治廿一年十月廿四日以泰長院所蔵 原本校讐 掌記鹽谷時敏」と書き込みがある。この記載は、掌記の鹽谷時敏が明治二年（一八八八年）一〇月二四日に、泰長院所蔵の原本を以て『朝鮮日記』を校讐、即ち校閲した、という意味である。この記述では、内閣文庫の『朝鮮日記』が、いつ作られたかは分からない。内閣文庫の『朝鮮日記』は「原本」ではなく「写本」であり、校閲した鹽谷時敏による「赤字」

の書き込みが数多くある。

また、内閣文庫の『朝鮮日記』には、表紙に「徳川家達献本」と記されている。徳川家達は、最後の将軍である徳川慶喜の次の徳川第一六代当主で、一八六三年八月二四日に生まれ一九四〇年六月五日に没している。原本は泰長院にあるので、「徳川家達献本」の意味は、徳川家達が写本の『朝鮮日記』を作成したか、または入手し、それを泰長院に「献本」したのであろう。この「献本」された『朝鮮日記』を「掌記」の鹽谷時敏が「校讐」したものが現在の内閣文庫の『朝鮮日記』である。

ここで検討すべきは、『朝鮮日記』というタイトルである。内閣文庫の『朝鮮日記』には表紙に『朝鮮日記』と書かれている。そして、本文の第一ページ、第一行には「在于朝鮮竹嶋城書之 是琢和尚」と書かれている。あたかも「タイトルと筆者」のようである。意味は「ここ朝鮮の竹嶋城で之を書く」である。この十三文字について、赤字で「此十三字後人所加」と校閲されている。つまり、この一三文字は、内閣文庫の『朝鮮日記』を作る時に書き加えられたものであると書いているのである。『佐賀県史料集成古文書編』の「明琳朝鮮役従軍日記」

にも、東京大学史料編纂所影写本にはこの十三文字はない。従って、この十三文字はタイトルではない。『佐賀県史料集成古文書編』には「明琳朝鮮役従軍日記」というタイトルで収録されている。「明琳」は是琢の名前で、佐賀県のホームページの「県指定(古文書)」欄<sup>(22)</sup>にも「是琢(明琳)」と記されている。東京大学史料編纂所影写本にはタイトルはないようである。

以上から、この是琢の書いた文書は、元々はタイトルはなく、内閣文庫の『朝鮮日記』を作る時に「朝鮮日記」と命名し、佐賀県史編纂委員会は、是琢の名前が明琳であり、是琢が鍋島直茂軍に従軍したので、「明琳朝鮮役従軍日記」と命名したのであろう。つまり『朝鮮日記』と通称されるようになったのは、内閣文庫『朝鮮日記』を作る時に『朝鮮日記』と命名したからではないだろうか。以上を踏まえて、本論では、便宜上、『朝鮮日記』を使用する。

それでは、『朝鮮日記』は、いつ、どこで、書かれたか。『朝鮮日記』の本文末尾には、「赤字」二行で「朝鮮国慶尚道金海府竹島□城」「文禄三年仲春十七日幻□如□明□叟□」と記されている。□は原文のままである。『佐賀県

史料集成古文書編』によれば、「朝鮮国慶尚道金海府竹島□城」の□は「新」と読んでいる。これは『朝鮮日記』に「竹島之新城」<sup>(23)</sup>という記述があるからであろう。「文禄三年仲春十七日幻□如琢明□叟□」は「幻葉如琢明琳叟書之」と読んでいる。この二行は、東大史料編纂所の影写本を見ると、本文の最後に書かれている。内閣文庫の『朝鮮日記』では、これが脱落していたので、校閲者の鹽谷時敏が書き加えたのであろう。そして、内閣文庫の『朝鮮日記』冒頭の「タイトルと筆者」のような「在于朝鮮竹嶋城書之是琢和尚」は、この二行を根拠に内閣文庫の『朝鮮日記』を作成する時に書き加えたのであろう。

この記述から、是琢が『朝鮮日記』を執筆したのは、「文禄三年仲春十七日」(一五九四年二月一七日)であり、場所は慶尚道金海府竹島新城であることが分かる。この根拠は『朝鮮日記』に記されている。つまり、是琢は一五九三年二月「晦日」に二度目の「入京」をする。その後一五九三年四月一八日に漢城を離れ、五月一七日に蔚山に行き、五月二八日西生浦の陣に入る。この時期、日本軍は釜山浦とその周辺に結集した。鍋島直茂は「西生浦

本城并端城一個所<sup>(24)</sup>」に陣をはった。是琢も同行した。六月一八日鍋島軍は慶尚道の晋州城攻撃に出発した。しかし、是琢は「予臥病不能従軍」、つまり、病気になって鍋島直茂の軍に従軍できなかった。そこで、七月一日「竹島新城」について。その後も体調は良くならず、「雖萬三年未得歸粉里」つまり、満三年になっても未だ二レの里に帰ることもできない、などと書いている。

是琢は病気になって鍋島直茂の軍に従軍できず、『朝鮮日記』を書いた「竹島新城」に滞在していたのである。他方、日本軍は文禄二年（一五九三年）五月二九日に晋州城を陥落させた。その後、秀吉は在朝鮮の諸大名に在番の城を指示するが、鍋島直茂は釜山に近い竹島の城であった。<sup>(25)</sup> 是琢はここで鍋島直茂と一緒にあった。その後、鍋島直茂は朝鮮に滞在する。

この間の「文禄三年仲春十七日」（一五九四年二月一七日）に是琢は『朝鮮日記』を書いた。内閣文庫の『朝鮮日記』の冒頭の後日追加されたと注記がある「在于朝鮮竹嶋城書之 是琢和尚」も、竹島城では琢が書いたという意味である。

#### 四、『朝鮮日記』と景福宮

次に、『朝鮮日記』の本文を見てみよう。『朝鮮日記』は「日記」とされているが、毎日書き足していく「日記」ではない。本文は、「文禄元年壬辰純陽廿有三日泛舟渡海」、つまり、「一五九二年四月二三日舟で海を渡る」から始まり、順次「梅天初七日泊舟釜山浦同八日到梁山十日到彦陽十二日到慶州」と是琢の進んだ行程を記している。つまり、「梅天」即ち五月七日は釜山の港で舟に泊まり、八日には梁山、一〇日には彦陽、一二日には慶州に着いたと記している。次に慶州での見聞を記述し、五月二八日に「入洛」する。つまり、漢城に到着する。その後「出洛」して開城府に赴いたと記している。第二軍の鍋島直茂の軍は五月二三日に漢城を出発して臨津江に向かい、二七日か二八日には臨津江の朝鮮軍を破って渡江に成功している。そして五月二九日には開城府に入っている。<sup>(26)</sup> 是琢が開城府に向かうのは鍋島直茂軍を追ってのことであろう。このように、是琢の日程は、第二軍の鍋島直茂

軍の行動とは同一ではない。

『朝鮮日記』のその後の記述をみると、開城府の見聞記を書き、その後永安道（咸鏡道）安邊府に到り、各地を経過して二日に永安道咸興府に到着する。ここでは咸興府が永安道の京であり、その歴史などを記している。そして、「明年癸巳仲春初四日」、即ち一五九三年二月四日に「朝鮮国王子臨海君順和君兄弟虜之引将来翼日予見王子君」とある。朝鮮の二人の王子が加藤清正に会寧で捕らえたのは一五九二年（文祿元年）七月二三日である。是琢は翌年二月四日に二人の王子に合つて、悲しみ哀れんでいる王子に漢詩を送つて慰めた。<sup>97)</sup>その後は琢は二月一日に咸興府を離れ、大雪の中、金剛山を越えて、二月「晦日入京」する。この日は盆を傾けるほどの大雨で、寒く、進むこともできず、陣笠もなく、「雖入京無陣屋徘徊南大門之畔」、即ち、京に入つても陣屋もなく南大門の周りを徘徊したと書いている。そして、男女、牛馬などの死骸が収容されず、臭気がひどいという凄まじい光景を見ている。三月四月になって暖かくなれば臭気が増して、人は皆病死するだろうと心配している。この様子から、漢城の混乱したままの状況が、一五九三年二月末で

も残つていたことになる。

『朝鮮日記』は、このように、是琢が見聞したことを、順を追つて記述した見聞記であり、日々の出来事を書いた「日記」ではない。

そして、この後に『京城府史』に引用された文章が書かれている。漢城の凄まじい光景を書いた後に、「又洛人曰」とあり、「洛人」、即ち「漢城の人」から聞き取った内容が書かれている。漢城が京畿道の本府で「二百五十年前」に開城府から移つたこと、三方に三角山など山があること、「石築牆高数尋而以圻三山倭人以杖計之即七里半矣以其石牆隅洛之中外」と記され、その後に『京城府史』に引用された「北山之下南面立紫宮……」が続くのである。石で築かれた牆（城壁）は大変高く、周りを三山で囲まれ、倭人が杖をもつて計れば七里半もの石牆（城壁）が都の内外に築かれておりというような意味であろう。そして、「北山の下に南向きに紫宮があつて……」と続くのである。

『京城府史』は、是琢『朝鮮日記』の一部を引用している。『朝鮮日記』の全文を読むと、景福宮について書いた箇所は「洛人曰」の内容であり、「漢城の人に聞いた話」

の一部である。その前に書かれた死骸があつた光景などは是琢の体験であるが、景福宮の様子は「洛人」から聞いた話であり、是琢の聞いた景福宮の風景も、是琢が最初に「入洛」した一五九二年（文禄元年）五月二八日や、次に再び入洛した一五九三年（文禄二年）二月晦日より前の状況ではないだろうか。日本軍の第一軍と第二軍が漢城府に攻め入るのは一五九二年（文禄元年）五月三日であり、宣祖が漢城を脱出するのはそれより前の四月二十九日ある。『宣祖修正実録』による民乱が起つたのはこの時である。

「洛人」は民乱の起こる前の、往事の素晴らしかった景福宮の様子を是琢に話した。『朝鮮日記』に書かれた景福宮の姿は、「洛人」から聞いた往事の景福宮の姿と考えるのが妥当だといえる。つまり、焼失する前の景福宮を是琢は見えていないといえる。

『朝鮮日記』は、景福宮の様子を書いた後、檀君以来の朝鮮の歴史を書いている。箕子朝鮮、百濟、馬韓、高句麗、弁韓、新羅、高麗、朝鮮と略史を書いている。是琢には新知識だったのだろうか。『朝鮮日記』は是琢の「憶え」を整理した記録である。

## 五、『京城府史』の記述

『京城府史』（第一巻）での「僧釈<sup>(28)</sup>是琢」の『朝鮮日記』は、壬辰戦争を扱った個所で引用されているのではない。

「第二編李朝時代の京城（其の一）」の「第一章李朝国初に於ける首府京城の建設」で、漢城の宮闕などを紹介するところでの景福宮についての記述である。ここでは、

創建後の景福宮の略史を述べ、壬辰戦争については「四月二十九日日軍の入城に先ち、城内乱民の放火により昌徳・昌慶の両宮及其他の公廨民家と同時に火災を被つた<sup>(29)</sup>。」その後景福宮は高宗代まで再建されなかつたと述べた後で、創建当時の景福宮の姿を知ることのできる資料として僧釈是琢の『朝鮮日記』をあげている。引用に当たつて次のような前文をつけている。

「文飾に過ぐる嫌はあるが、壬辰役に於て日軍入城の際の觀察録を見れば、国初に於ける宮殿の面影を略々推知することが出来る。」<sup>(30)</sup>と記して、『朝鮮日記』を引用している。

ここに見るように、『京城府史』では、「城内乱民の放火により昌徳・昌慶の両宮……火災を被った」と、昌徳宮と昌慶宮に言及しているが、景福宮の火災に触れていない。直後の『朝鮮日記』の引用との関係を見れば、「乱民の放火」によって景福宮が焼けてしまつては矛盾するからであろう。

それでは、『京城府史』では壬辰戦争をどのように記述し、景福宮をどのように描いているかを見てみよう。「第四章 文祿慶長の役当時の京城」の「一 京城を中心として見た同役の経過」である。

ここでは、宣祖が昌徳宮仁和門から出発し、西大門を出たあたりで夜が明けて、「顧みて城内を望めば大火南大門付近に起り、次第に他方に燃焼しつゝあつた。此れは乱民が相争ふて先づ南大門内の宣恵庁(今の消防署及市場の付近)を焼いたのである。次で掌隷院、刑曹(現光化門通通信局の付近)を焼き、進んで王宮に乱入して内帑庫に入り金錢宝玉を掠奪し、更に景福宮・昌徳宮に放火した。此の外王子臨海君の邸、前兵曹判書洪汝淳の邸をも焼いた。」<sup>(32)</sup>と書いている。この記述は、前に見た『宣祖修正実録』の記事と同じ内容である。ここでは「景福宮・昌

徳宮」の二つの宮闕が「放火」されたと記している。つまり、景福宮が全て燃えてしまったとは書いていない点に注目する必要がある。

『京城府史』では、同じ第四章に「一同役に於ける京城の荒廃」という項がある。ここでは漢城の火災に日本軍が関係していないことを強調している。漢城の荒廃は乱民の放火によるものであることは、朝鮮の書物でも一致しているという。その書物<sup>(33)</sup>は、宣祖実録、国朝宝鑑、懲愆録、象村集、再造藩邦志、朝野輯要、青野漫輯、西崖集である。

これらを簡単に紹介すれば、次のようなものである。

#### 宣祖実録

朝鮮第一四代宣祖の在位四一年間の實録、壬辰戦争の時々の王である。

#### 国朝宝鑑

朝鮮王朝の歴代国王の治績のなかから模範となる事実を収録した編年体の歴史書。九

〇巻。

#### 懲愆録

朝鮮中期の文臣で学者の柳成龍(一五四二～

## 象村集

一六〇七）が壬辰戦争の間に経験した事実を記録した本。この本は一五九二年（宣祖二五）から一五九八年（宣祖三一）までの七年間の記事で、壬辰戦争が終わった後、著者が官職から退いている時に著述したものである。本の内容は壬辰戦争が起きた後の記事が大部分を占める。その中には壬辰戦争以前の対日関係での交隣事情も一部記録しているが、それは壬辰戦争の端初を詳しく明らかにするためである。日本語翻訳『懲毖録』（東洋文庫三五七）平凡社、一九七九年。

朝鮮中期の文臣象村申欽（一五六六年（明宗二一）～一六二八年（仁祖六））の文集。漢文四大家の一人である著者の試験の精髓と道学全盛期に体得した広範囲な性理学的体系と多様な思想が含まれている。彼の文学・学術・思想・道徳・功績だけでなく宣祖、仁祖年間の政治、外交、軍事および思想を考察できる重要な資料。

## 再造藩邦志

朝鮮中期の学者申晷が壬辰戦争前後の朝鮮と明の関係と朝鮮が明の後援で再建された事実を記録した本。

## 朝野輯要

朝鮮建国から純祖初期までを編年體で記録した歴史書。

## 青野漫輯

不明

## 西崖集

宣祖代の文臣柳成龍の詩文集。木版本二〇卷一冊。一六三三年（仁祖一一）に息子彬が陝川の郡守であった時に刊行した。

『京城府史』は、漢城が乱民によって放火されたことを強調しているが、景福宮などの大きな建物は焼け残りがあったとも記している。すなわち「王宮が全焼した如く記されあるが、宮殿の如き大廈高楼には尚ほ若干の焼け残りがあつた。稍文飾に過ぎた嫌はあるが、日軍の日記である釋是琢の朝鮮日記、肥前旧記の一節（第二編第一章

景福宮の條に掲載）によつて明かに之を知ることが出来る。この日記は確に當時の状況を目睹しなければ能はぬことである。凡べて大事變のあつた時には、誇大に失する記事の現はれるのは古今皆同様である。

京城古地図によれば景福宮域内に慶會樓の石柱のみ残存し、他は鬱蒼たる状況を記してゐるが、戦後復旧の事業も容易に捗らず、多年放棄する内朽敗して狐狸の住家に等しき様となつたのである。<sup>(34)</sup>

ここでは前に引用した是琢の『朝鮮日記』にも言及し、景福宮にあつた大きな建物の中には焼け残つたものもあり、それを是琢は見たと記している。大きな事件の時には誇大に記されることがあつて、景福宮などの全焼・荒廃もそのようなものだと言張している。壬辰戦争以来、高宗代まで復元されなかつたので、その間荒廃していたものを全て壬辰戦争の時のことにしているといふのである。

しかし、『京城府史』の筆者が、是琢の『朝鮮日記』の全文を詳細に読んだかどうかは不明である。先に見たように「洛人曰」以後の記述は是琢が直接見聞した景福宮ではないと判断できる。

## 六、景福宮はいつ焼失したか

景福宮が壬辰戦争の時に焼失したことは事実である。だが、大きな建物の焼け残りがあつた可能性もある。

李康根は、著書『景福宮』で乱民が景福宮を焼いてしまったことを否定し、すでに引用したように、「平壤城戦鬪で敗れ、漢陽までも奪還されるといふ敗戦を繰り返した倭軍が退却すると同時に、宗廟と宮闕を始めとした都城施設を放火し略奪と殺戮を恣に行つたのである。<sup>(35)</sup>」と記している。

それでは、日本軍が平壤で破れ、漢陽が奪還され、漢陽から退却した時のことを見てみよう。日本での壬辰戦争研究の第一人者である北島万次の研究によると、日本軍が平壤で敗戦し、平壤から脱出するのは一九三年一月七日である。明軍と朝鮮軍に追われて南下し、小西行長、黒田長政らは開城府で小早川隆景と合流して漢城府へ退いた。これを見た「漢城府の朝鮮民衆は南下する明

・朝鮮軍に内応する動きを見せた（『宣祖実録』宣祖二六年正月丁丑）。日本軍はこれをおそれ、漢城府にいる朝鮮人を殺戮する（『高麗日記』一月二三日）。それにつき「李朝実録」はつぎのように記している。

倭軍、大いに京城（漢城府の朝鮮人）の人を殺す。行長、平壤の敗を

忿り、且つ我人、天兵に外応するを疑い、尽く、都中の民庶を殺す。惟だ女人のみは死を免る。男子、或いは女服を扮着して免るる者有り。

（「宣祖修正実録」宣祖二六年正月）  
(36)

ここに見るように、漢城に引き返した日本軍は漢城で朝鮮人を殺戮した。しかし、景福宮などを放火した、などの記述はない。

そして、「平壤の敗北を契機に朝鮮での戦局は攻守ところをかえ、日本軍は守勢にまわった<sup>(37)</sup>。」と言う。この後、一月末に日本軍は碧蹄館の戦いで明軍に勝利し、二月には朝鮮軍が幸州山城の戦いで勝利し、日本軍は再び漢城に撤退した。そして四月になって日本軍は在朝鮮諸将での協議の末に、戦いが劣勢であり兵糧米が不足したため

に、明軍との講和交渉を行い、漢城府からの撤退を決めた。一五九三年四月一八日、日本軍は明の使節と称する「参将謝用梓と遊撃徐一貫<sup>(38)</sup>」らと共に漢城府を撤退した。以上、北島万次の研究に依拠して、撤退までの経過を簡単に見たが、この研究には撤退時の様子は記されていない。

『京城府史』によれば、「三奉行等は譬ひ講和中とは云へ、尚ほ敵が追撃することを憂慮したが、小早川隆景は明使を質として同行すれば其の憂はないと云つた。よつて明の二使、沈惟敬、二王子を軍中に擁し、十九日全部撤退し、通過した所の漢江船橋は之を破壊した。」という。その後、明軍、朝鮮軍の追撃はなく、「京城を後にし悠悠として南下した」と記している<sup>(39)</sup>。

ここに見る限り、李康根の言うような、日本軍の漢城撤退時に「宗廟と宮闕を始めとした都城施設を放火し略奪と殺戮を恣行した」という状況は読み取れない。

## おわりに

景福宮の歴史のなかで、景福宮が日本と関係した最初

の出来事が壬辰戦争であった。韓国の多くの研究は、景福宮は日本軍の入城前に乱民によつて焼かれてしまったとしている。しかし、韓国でも代表的な景福宮研究者である李康根は、日本軍が入城した時には景福宮は残っており、それは鍋島直茂軍の僧積是琢の『朝鮮日記』に記されている通りであると主張した。韓国に残っている多くの資料が、後日の記述であるのに対して、積是琢『朝鮮日記』はその時の見聞であり、信憑性が高いと見ている。しかし、すでに見たように積是琢『朝鮮日記』の記述は、『洛人曰』の内容で、是琢の自らの見聞記ではない。

景福宮はいつ、誰によつて焼却されたかについて、李康根は日本軍の漢城からの撤退時であると自著『景福宮』で記しているが、その論拠を示していない。そこで日本軍の漢城からの撤退時の状況を見ると、景福宮などを焼却して撤退することはなかったのではないかと推測された。

従つて、李康根の主張を肯定することは難しい。景福宮に『京城府史』のいうように焼け残りがあつたとしても景福宮の焼失時期の確定にはならない。多くの朝鮮の資料は、乱民による焼却説をとっている。筆者も、これ

らの研究に依拠して論を進めている。

推測ではあるが、『京城府史』の筆者も李康根も、『朝鮮日記』の全文を読んでいるように思われる。李康根の『景福宮』は、初版の発行が一九九八年である。『佐賀県史料集成古文書編』（第五巻）は一九六〇年の刊行である。李康根が『景福宮』を執筆する三〇年以上も前に『朝鮮日記』は活字になっていた。しかし、『佐賀県史料集成古文書編』の「奥付」を見ると「非売品」と書かれている。さらに収録の際のタイトルも「明琳朝鮮役従軍日記」であり、是琢という名前も「朝鮮日記」というタイトルもない。さらに、内閣文庫の『朝鮮日記』が国立公文書館デジタルアーカイブで検索できるようになったのは、李康根『景福宮』の刊行よりもさらに後日であつたと思われる。これらのことを考慮すると、李康根が日本の史料を調査して研究に利用することは困難だったのかも知れない。日本と韓国での研究者の交流と史料に共有が重要であると考ええる。

李康根は、一九八四年の碩士論文や前掲「景福宮重建」では、壬辰戦争当時の景福宮の焼失には言及していない。景福宮が壬辰戦争の時に焼失した事実と異論を挟む人

はいない。古い研究論文ではあるが、李鉉淙が論文<sup>(40)</sup>でいう主張を聞いてまとめたい。

建物文化財などの償却破壊された状況について見れば、宣祖がソウルを立ち去った直後、一部没知覚した乱民が焚焼してしまったことと混雑していたが、これもまた窮極的に問うてみれば、倭人に責任があることで、もし倭乱が起らなかったならば焼却されなかったことは明白な事実である。よって、過去、日本人学者が都城の被禍について、倭軍入京前に焚焼し、倭軍が直接関与しなかったことを指摘しているが、根源はどこまでも倭乱に起因しているという事実である。

### 【注】

- (1) 最も新しい朝鮮史の通史である、李成市、宮嶋博史、糟谷憲一編『世界歴史大系 朝鮮史一』（山川出版社、二〇一七年）は、秀吉の「朝鮮侵攻」と記述しているが、一五九二年の出来事を「第一次侵攻（壬辰倭乱文禄の役）」（二七〇頁）と両方の名称で記述している。

- (2) 二〇一二年からは（株）天才教育の「東アジア史」教科書と（株）教学社の「東アジア史」教科書が使われたが、どちらも「壬辰戦争」を使っている。天才教育（一三四頁）は丁酉再乱も使用。教学社（一一六頁）は壬辰戦争と丁酉戦争を使用。
- (3) 鄭杜熙・李璟珣編著、金文子監訳、小幡倫裕訳『壬辰戦争―十六世紀日・韓・中の国際戦争』明石書店、二〇〇八年。
- (4) 『임진왜란―동아시아삼국전쟁』西江大学校韓国学センター企画、ピューマニスト、二〇〇七年。日本語で表記すれば『壬辰倭乱―東アジア三国戦争』である。  
<https://www.nihonshiken.jp/2016-06-14-01-04-36/>（二〇一九年六月二三日）。例会の内容については、『日本史研究』六五八号、二〇一七年六月、九三頁以下を参照。
- (5) 六反田豊「第七章 朝鮮中期」の「三 日本と清の侵攻」、前掲『世界歴史大系 朝鮮史一』三七頁。
- (6) 『宣祖修正実録』（宣祖二五年四月一四日癸卯二八番記事）都城宮省火。車駕將出、都中有姦民、先入 帑庫、爭取寶物者。已而駕出、亂民大起、先焚掌隷院、刑曹、以二局公、私奴婢文籍所在也。遂大掠宮省、倉庫、仍放火滅迹。景福、昌德、昌慶三宮、一時 燼。昌慶宮即順懷世子嬪嬪宮所在也。歷代寶玩及文武樓、弘文館所藏書籍、



- (22) <http://www.pref.saga.lg.jp/ki/ji0031455/index.html>  
(二〇一九年七月二日)。
- (23) 内閣文庫『朝鮮日記』一二頁。
- (24) 前掲『朝鮮日々記・高麗日記』二四七頁。
- (25) 同右書、二五三頁。
- (26) 同右書、六三頁と巻末の年表による。
- (27) 『佐賀県近世史料』第一編第一卷「直茂公譜」一九五頁。  
(28) 是琢の泰長院は現在は臨濟宗の寺である。僧に「釈」をつけるのは浄土真宗である。臨濟宗の僧も「釈」をつけるのか、当時は泰長院は浄土真宗の寺だったのかは、不明である。
- (29) 前掲、『京城府史』(第一卷)、五〇頁。
- (30) 同右書、五一頁。
- (31) 同右書、二四三頁以下。
- (32) 同右書、二五三頁。
- (33) 同右書、二六七頁。
- (34) 同右書、二六九頁。
- (35) 前掲『景福宮』三四頁。
- (36) 前掲『朝鮮日々記・高麗日記』二〇八〜二〇九頁、ルビは北島。
- (37) 同右書、二一〇頁。
- (38) 前掲『京城府史』(第一卷)、二六一頁。

- (39) 同右書、二六一〜二六二頁。
- (40) 李鉉淙「壬辰倭乱とソウル」『郷土ソウル』第一八号、一九六三年一〇月二五日、五五頁(韓国語)。